



Title	母音弱化現象の通言語的解釈とカタルーニャ語にみられる対称性の有無
Author(s)	蔵満, 啓太
Citation	Estudios Hispánicos. 2025, 49, p. 63-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

母音弱化現象の通言語的解釈と カタルーニャ語にみられる対称性の有無¹

蔵 満 啓 太

0. 目的

本稿は、世界のあらゆる言語において普遍的に観察される一音韻現象、母音弱化現象のこれまでの解釈を一覧し、それぞれの特徴を一律化したのち、通言語的な再定義をおこなう。またカタルーニャ語の現象をとりあげ、先行研究による定義を批判的に分析し、さらには母音の脱落といった音声的分析の余地も提案する。本稿では、まずカタルーニャ語について記述したのち、これまで諸研究者および辞書などによって定義されてきた母音弱化現象の解釈を概観する。つぎに、各定義における観点を考慮しながら、母音弱化現象の新たな解釈を提示する。さらに、先行研究で注目されていない点についても指摘し、カタルーニャ語にみられる母音弱化現象の豊富さについて付け加える。

1. カタルーニャ語

カタルーニャ語が話されている地域、または該当する文化圏はまとめて「カタルーニャ諸地域 (Països Catalans)」²と呼ばれ、大半の話者が各地域でスペイン語、イタリア語、フランス語とのバイリンガルである。カタルーニャ語は、

- 1 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP 2138 の支援を受けたものである。
- 2 この概念をどのように呼ぶかは研究者によっても統一されておらず、多くの呼称が存在する。田澤 (2013) では「カタルーニャ諸国」、田澤 (2021) では「カタルーニャ語圏」または「カタルーニャ語を話す国々」、立石・奥野 (2022) では「カタルーニャ諸地方」と記述されている。諸国や国々といった表現は、上で列挙した地域が各々ひとつの国であるかといえば、スペインも自治州まで焦点を絞らなければカタルーニャ語が話されている地域を限定できず、アンドラ公国やフランス、イタリアでも全国で話されているわけではないことを考慮すると「国」と一括りにまとめがたいことがわかる。この Països は、文脈によって民族、国、国民をあらわす「ネーション (nació)」や国家をあらわす「ステイト (estat)」とも異なる概念をもちあわせている。また、「カタルーニャ」という言葉にも狭義でいう「スペインのカタルーニャ州」という意味と、広義でいう「カタルーニャ語が使用されている文化圏」という意味がある。後者は政治的な意味を持つ場合があり、カタルーニャ中心主義という含意があることで使用を避ける傾向があるのも事実である。

音韻体系、音声体系、屈折形態素のバリエーション、語彙のバリエーションを中心にふたつの方言体に大別される。

1.1 カタルーニャ語東部方言体

カタルーニャ語東部方言体に分類される変種は、スペイン・カタルーニャ州中央部の各方言（中央方言、salat 方言、xipella 方言、バルセロナ方言、タラゴナ方言）、バルセロナから南に約 200 km 離れた島嶼、スペイン・バレアレス諸島自治州の 3 方言³（マジョルカ方言、メノルカ方言、イビサ方言）、フランス南部・ルシオンの Capcir 方言、イタリア・サッサリ県で使用されているアルゲーロ方言である。これら諸方言のなかでも、バレアレス方言はほかの方言にはみられない言語学的特徴を有している。たとえば、強勢位置に中舌母音シュワ [ə] が出現するのに加えて、ラテン語 ipse, ipsa, ipsum を語源にもつロマンス諸語のなかでもめずらしい定冠詞 article salat が多用される。

表 1：カタルーニャ語東部方言体

	国	地域	方言下位区分
東部方言	フランス	ルシヨン (rossellonès)	Capcir 方言
	イタリア	アルゲーロ (alguerès)	なし
	スペイン	バレアレス諸島自治州 (balear, insular)	マジョルカ方言 (mallorquí)
			メノルカ方言 (menorquí)
			イビサ方言 (eivissenc)
		カタルーニャ州 中央部 (central)	中央方言 (septentrional de transició)
			salat 方言 (salat)
			xipella 方言 (xipella)
			バルセロナ方言 (barceloní)
			タラゴナ方言 (tarragoní)

1.2 カタルーニャ語西部方言体

カタルーニャ語西部方言体はアンドラ公国とスペインの 2 カ国で話されている方言のみで全体数は東部方言よりも少ない。スペイン・カタルーニャ州

3 バレアレス諸島 (les Illes Balears) は、ジムネジას群島 (les Illes Gimnèsies) とピティウザス群島 (les Illes Pitiüses) の 2 つの群島とその周辺に位置する小島で構成されている。ジムネジას群島には、マジョルカ方言 (mallorquí) が使用されているマジョルカ島 (Mallorca) とメノルカ方言 (menorquí) が使用されているメノルカ島 (Menorca)、その他無人島が 6 島存在する。一方、ピティウザス群島はイビサ方言 (eivissenc) が使用されているイビサ島 (Eivissa) とフォルメンテラ島 (Formentera)、その他無人島 6 島から構成されている。

母音弱化現象の通言語的解釈とカタルーニャ語にみられる対称性の有無（蔵満）

北西部およびバレンシア州が西部方言の中心となる変種としてあげられる。また、カタルーニャ語西部方言はのちに詳述しているとおり、母音弱化現象の様相も東部方言とは異なる。東部方言では主に /a, ε, e/ > [ə], /ɔ, o/ > [u] という変化をする一方、カタルーニャ語西部方言では主に /ε/ > [e], /ɔ/ > [o] という半広母音が半狭母音に収斂する特徴のみを持っているのが共通項である⁴。

表2：カタルーニャ語西部方言体

	国	地域		方言下位区分
西部方言	アンドラ公国			リバゴルサ方言 (ribagorçà)
	スペイン	カタルーニャ州	北西部 (nord-occidental)	
				Pallars 方言 (pallarsès)
				トルトサ方言 (tortosí)
		バレンシア州 (meridional, valencià)		北部方言 (septentrional)
				中部方言 (apitxat/valencià central)
				南部方言 (meridional)
				タルベナ方言 /Vall de Gallinera 方言 ⁵

2. 先行研究による母音弱化現象の解釈

母音弱化現象はカタルーニャ語のみならず、ラテンアメリカの一部地域で使用されているスペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などのロマンス諸語、ロシア語、ブルガリア語、ベラルーシ語をはじめとするスラヴ諸語、英語やドイツ語などのゲルマン諸語など印欧語族の多数の言語で観察される。そのうえ、ユト・アステカ語族に属するルイセーニョ語 (Harris, 2005)、言語系統に関して研究者によって見解がわかれている日本語や朝鮮語でも同様の音韻現象がみられるため、通言語的に研究されてきた。ここでは、母音弱化現象の定義について諸研究者の記述をとりあげ、各記述において言及されている事項をまとめる。それらの解釈をふまえて、個別言語に適応されるものではなく、通言語的な特徴を反映した音韻現象としての母音弱化現象の定義を新たに提案する。

4 「中舌母音」という呼称を用いると、口腔内前後位置における中舌母音と開口度における中舌母音で解釈の曖昧性が生じるため、本稿では開口度の観点から /e, o/ を「半狭母音」、/ε, ɔ/ を「半広母音」と呼ぶこととする。/a/ やカタルーニャ語の体系に存在するシュワは名称を変更することなく、そのまま「中舌母音」とすることで前者と差別化をはかっている。

5 タルベナと Vall de Gallinera は、17 世紀初頭にキリスト教に改宗したイスラム教徒、モロ人の追放後すぐにマジョルカ島からやってきた人々が移り住んだため、マジョルカ方言の一部の語彙的特徴を保持している。

2.1 DIEC 2 (2021)⁶

はじめに、DIEC2 は *reducció* を見出し語とし、4 つ目の定義（語連接 *reducció vocàlica*）として以下のように定義している。

(1) DIEC2 (2021, s.v. *reducció*)

“1 4 [FL] *reducció vocàlica* Pèrdua de distincions fonològiques en les vocals que apareixen en síl·laba àtona, respecte a les distincions que es donen en síl·laba tònica.”

『1 4 [言語学] 強勢音節では引き起こされる音韻的弁別性に対して、弱勢音節にあらわれる母音においては音韻的弁別性を喪失する現象。』

DIEC2 (2021) は、強勢位置に生じていた音韻的弁別性が弱勢位置において消失するという特徴にのみ言及しているため、弱勢音節がターゲットであるという通言語的な特徴を反映していると考えられる。ここで、通言語的に起こるとされている「音韻的弁別性の消失」を説明するためにカタルーニャ語語彙 *carro* ['ka.ru] > *carret* [kə.'ret] > *carretó* [kə.rə.'to]⁷ を導入する。*carro* を語基として評価接尾辞 *-et* が付加された形式 *carret* が作られ、さらに *carret* を語基として別の評価接尾辞 *-ó* を付け加えると *carretó* を生成することができる。カタルーニャ語の強勢音節は弱化対象とはならず、*carro* > *carret* > *carretó* の強勢音節にある母音 /a/, /ɛ/, /o/ は変化を被ることがないため、そのままの音価が保たれる ([a], [ɛ], [o] または /a/, /ɛ/, /o/)。その一方で、母音弱化現象が引き起こされるアクセントの置かれていない音節においては、音価が保持されることなく別の音が実現される。*carro* の第 2 音節、*carret* の第 1 音節、*carretó* の第 1 および第 2 音節が弱勢音節に該当し、それぞれつぎのように発音される：['ka.ru] > [kə.'ret] > [kə.rə.'to]。したがって、強勢音節内で具現化されている音声 [a], [ɛ] と弱勢音節内で表層形として出力されている音声と比較すると、強勢音節で保たれていた音素 /a/, /ɛ/ が弱勢音節において中舌母音 [ə] へと中和され、音価の区別がなくなっていることがわかる。また、カタルーニャ語東部方言の /ə/

6 Diccionari de la llengua catalana de l'Institut d'Estudis Catalans 2 の略記である。

7 強勢が置かれている音節には最初に記号 ['] を付している。また、> は派生関係を表しており、やじるしの左から右へと派生プロセスが発生している。

o/ > [u]、カタルーニャ語西部方言の /ɛ/ > [e], /ɔ/ > [o] についても同様のメカニズムを用いて音韻的弁別性の消失を解説することが可能である。以上の説明から、DIEC2 (2021) は母音弱化現象の定義として、強勢音節内における音韻的弁別性が弱勢音節内で失われることを採用している。

2.2 Carrera Sabaté et al. (2014)

Carrera-Sabaté et al. (2014) は、カタルーニャ語東部方言の例のほかにロシア語の例をあげて下記のように母音弱化現象を定義している。

(2) Carrera-Sabaté et al. (2014)

“Procés fonològic de neutralització de contrastos vocàlics en posició àtona. Fonèticament, el vocal sol esdevenir centralitzat pel que fa al timbre i menys intens i més baix quant als trets prosòdics. Per exemple, en català oriental [‘a], [‘ɛ], [‘e] esdevenen [ə] en posició àtona : *carro* > *carret* / *carretó* [‘ka.ru] > [kə.‘rɛt] > [kə.rə.‘to]; en rus [‘o] > [a]: [‘bom.ba] ‘bomba’ > [bam.‘bʲi.tʲ] ‘bombardejar’.”

『弱勢位置における母音対立の中和の音韻プロセスのこと。音声的に、その母音は音質の観点から中舌母音に、韻律の特徴からより弱く、さらにより低く調音される傾向がある。たとえば、カタルーニャ語東部方言において、強勢のある [‘a], [‘ɛ], [‘e] が弱勢位置において [ə] となる : *carro* 「荷車」 > *carret* 「カート」 / *carretó* 「小型の荷車」 [‘ka.ru] > [kə.‘rɛt] > [kə.rə.‘to]; ロシア語 ([o] > [a]): *бомба* [‘bom.ba] 「爆弾」 > *бомбить* [bam.‘bʲi.tʲ] 「爆弾を投下する」』⁸
(例語の日本語訳、音節区切り、キリル文字による表記は筆者による)

上記の定義から、第1にDIEC2 (2021)も指摘していたように母音弱化現象は弱勢音節において母音の弁別性が失われること、第2に音声的に中舌母音に変化すること、第3に韻律的観点から強勢のある音節で実現される母音よ

8 原文において記載されていた(第一)アクセント位置をしめす記号は、International Phonetic Alphabet (IPA)の超分節要素記号[ˈ]にすべて置き換えている。

りもインテンシティおよびトーンが低いことが読みとれる。

2点目の言及で、強勢にあった母音が中舌化する傾向にあるという指摘があるが、カタルーニャ語における当該現象を説明するには根拠として弱いように思われる。先述のとおり、カタルーニャ語東部方言での /a, ε, e/ > [ə] の変化は Carrera Sabaté et al. (2014) の中舌化に当てはめられるが、東部方言の収縮 /ɔ, o/ > [u] およびカタルーニャ語西部方言の /ɛ/ > [e], /ɔ/ > [o] が完全に除外されてしまうからである。また、中舌母音以外の音価に収束する様相の弱化をみせる言語はカタルーニャ語以外にも存在するため、通言語的な定義提案にも適していないと考えられる (Harris, 2005: ブルガリア語、ルイセーニョ語; Pöchtrager, 2018: ブラジルポルトガル語、カタルーニャ語東部方言、ロシア語; Pöchtrager, 2024: ポルトガルポルトガル語)。具体例としてカタルーニャ語のつぎにロシア語が示されており、弱化位置に相当する弱勢の母音のなかでもとくに [o] > [a] の変化には *аканье*⁹ という用語がつけられている。ロシア語にはこの様相以外にも弱化の種類は複数存在し、こちらも等しくシュワへの中舌化だけでは説明できない。

そして、3つ目の韻律的な特徴について強弱と高低の指標が用いられているが、基本的にカタルーニャ語では強勢音節に通常置かれるハイトーン (to agut)、強勢音節に前置している弱勢音節に付与されるミドルトーン (to mig)、強勢音節に後続する音節内にあるロートーン (to greu) の3段階で記述されるのが慣習である。たとえば、“Ve la Clara.”『クララが来る。』という発話をとりあげると、観察されるイントネーションパターンから [Ve la] と [Cla ra] に2分することができ、各ブロックにおいて相対的なハイトーン [alt] およびロートーン [baix] を割り当てることが可能である。発話のなかで1番際立ちの高いイントネーション構成要素 (constituent entonacional) は文頭にある動詞 venir¹⁰ に存在し、それ以降の語に生じているイントネーションは下降パターンである。このような意味でのイントネーションの高低が母音弱化現象においても影響を及ぼしていることが想定できるだろう。実際に弱勢音節である2語目の定冠詞女性単数形 la と固有名詞 Clara の第2音節に該当する ra はイントネーションが強勢音節に比べて低いことから、上記の韻律的観点をういた

9 アクセントが置かれる母音ないしは位置を「力点 (ударение)」と呼ぶ (東, 2019)。

10 例文では3人称単数現在形 (ve) に活用されている。また、呼びかけ以外のケースでは通常、人名の前に定冠詞の一種である人名冠詞 (article personal) を配置させる。なお、人名冠詞は方言によりさまざまな変種がみられる。

定義が提案されている¹¹。

2.3 GEIEC¹² (2022)

GEIEC (2022) は、DIEC2 (2021) および Carrera Sabaté et al. (2014) でとりあげられていた音韻的弁別性の喪失に関する記述を組み入れず、音声的な特徴としての音質の変化にのみ論及している。

(3) 弱勢音節の母音音価の変化

“La **reducció vocàlica** es pot definir com el procés pel qual certes vocals que es troben en posició tònica no poden aparèixer en posició àtona, on són substituïdes per una altra vocal, com es resumeix i s'exemplifica en el quadre 1.4.”

『母音弱化とは、強勢位置に存在する特定の母音が弱勢位置ではあらわれることができなくなり、ほかの母音に置きかえられるプロセスとして定義される。つぎの表 1.4. で例語とともにまとめている。』

表 3：Reducció vocàlica

Posició tònica	Posició àtona		Exemples
	major parts dels parlars orientals	parlars occidentals	
[e]	[ə]	[e]	<i>carrer – carretó</i>
[ɛ]			<i>mel – melós</i>
[a]		[a]	<i>canta – cantar</i>
[ɔ]	[u]	[o]	<i>fosc – foscor</i>
[o]			<i>poc – poquet</i>

（表番号は本発表用書き換えている）

しかしながら、上記の母音弱化の解釈のなかで強勢音節内の母音の音価が弱勢音節内で変わるという基軸に沿って記述されているものの、「とあるほかの母音への置換」という表現は通言語的な定義を設定する際に幾分曖昧性をも

11 詳細な音響分析は Bonet et al. (1998) では実施されていないが、音節やアクセントの強弱とイントネーションの高低の間の相関関係は上で描写したイントネーションの強弱構造にて顕著に現れている。

12 Gramàtica essencial de la llengua catalana de l'Institut d'Estudis Catalans の略記である。

たらず。カタルーニャ語、ロマンス諸語、あるいは言語系統の枠を超えた母音弱化の法則性について音韻的、音声学的知見から分析するために、より詳細かつあらゆる言語に普遍的な音価の変化パターンの記述を組みこむ必要があると筆者は考えている。

2.4 Harris (2005)

最後に、プラスおよびマイナスの価値を与え、どのような母音変化が起きているかを記述していた音韻素性理論とは異なり、音韻情報の欠落 (information loss) として諸言語で観察されるあらゆる母音弱化現象を一元的かつ統一的に捉え直した Harris (2005) の母音弱化現象の解釈を確認し、カタルーニャ語の同現象への援用を試みる。

(4) 母音弱化現象の通言語的条件

“First, they (phonological effects traditionally referred to as vowel reduction) target positions that are prosodically or morphologically weak, most especially unstressed syllables or affixes. Second, they neutralize contrasts, producing contracted versions of vowel systems that appear in strong positions.”

『第1に、それら（母音弱化として伝統的に言及されている音韻効果）は韻律的あるいは形態的に弱い位置を対象とし、とりわけ無強勢音節や接辞が該当する。第2に、母音弱化は対立を中和することにより、強い位置に現れていた母音体系を縮約させる。』¹³

Harris (2005) で、母音弱化現象の通言語的特徴として指摘されている点は、韻律的または形態的に弱い位置において発生すること、そして音韻的対立を中和させることの2点があげられる。2点目の音韻的対立の中和、つまり音韻的弁別性の消失は、上記ですでに言及している DIEC2 (2021) および Carrera Sabaté et al. (2014) と共通項である。1点目の韻律的観点から相対的にほかの言語学的要素よりも弱い箇所がターゲットとなることは Carrera-Sabaté et al. (2014) でも言及されているが、それに加えて、Harris (2005) は形態的観点を

13 引用内部()は発表者が文脈を明らかにするために追記。

採用している。さらに、韻律的に弱い位置の具体例として無強勢音節、形態的に弱い語彙の具体例として接辞をあげていることが Harris (2005) の定義から読みとれる。しかし、母音弱化現象が生起するターゲットとして接辞をとりあげ、カタルーニャ語の母音弱化現象を記述する場合、接辞の種類によって実現に変化が生じることは特筆すべきである。IEC (2016) では、接頭辞が2つの分類にふりわけられることが論じられており、*arxi-*, *ex-*, *anti-*, *pseudo-*, *semi-*, *sots-* などのような強勢接頭辞 (*prefixos tònic*s) では母音弱化現象が起きないケースが多いとされている。一方、弱勢接頭辞 (*prefixos àton*s) 中で弱勢位置に置かれている母音は弱化しやすい。具体的に、弱勢接頭辞の例として *a-*, *en-*, *des-*, *es-* があげられている。

(5) 強勢接頭辞と弱勢接頭辞

“Tot i que l’accent de mot no recau en els prefixos, n’hi ha que s’han anomenat tradicionalment prefixos tònic pel fet que no presenten la reducció vocàlica típica de les síl·labes àtones dels parlars orientals. En el mot *arxiconegut*, per exemple, l’accent recau en la síl·laba *gut* de la base (*conegut*) i la vocal de la síl·laba *ar* del prefix (*arxi-*) no es redueix a [ə] en els parlars orientals: [a]rxi^hconeg[ú]t. Tampoc no hi ha reducció a [ə] en el cas del prefix *ex* del mot *exmarit*: [ɛ]xmar[i]t. En sentit contrari, s’anomenen tradicionalment prefixos àton aquells en què sí que es produeix la reducció vocàlica pròpia dels parlars orientals, com ocorre amb els prefixos *a-* i *en-* de *asimètric* i *engelosir*, respectivament, en què les vocals *a* i *e* es redueixen a [ə] en oriental: [ə]si^hmètric, [ə]n^hgelosir.”

『語彙アクセントは接頭辞にはかからないものの、カタルーニャ語東部方言の弱勢音節に典型的に起こる母音弱化を呈さないとされる「強勢接頭辞」と伝統的に呼ばれる接頭辞が存在する。たとえば、カタルーニャ語東部方言の変種に限り、*arxiconegut*「とてもよく知られた」という語では、語基である *conegut*「知られた」の最終音節にアクセントが落ちるが、接頭辞 *arxi-* の音

節内に存在する母音は [ə] へと弱化しない。exmarit「元旦那」に付与されている接頭辞 ex- の場合であっても同様にシュワへの弱化はみられない。一方で、母音弱化を引き起こすとされる「弱勢接頭辞」と伝統的に呼ばれる接頭辞では、それぞれ *asimètric*「非対称の」および *engelosir*「嫉妬させる」に付与されている a- および en- の母音が弱化して中舌母音へと変化する。』（例語の日本語訳は筆者による）

強勢接頭辞と弱勢接頭辞の強勢付与の差異に関する記述は、ésAdir (2025) にも下記のように列挙されている。

(6) 接頭辞付与された複合語の強勢付与

“Les paraules compostes amb prefixos tòrics conserven, en general, les dues vocals tòriques. Hi ha compostos en què o bé el prefix sempre ha estat àton o bé s’ha desgastat i tenen, per tant, una sola síl·laba tòrica.”

『強勢接頭辞が付与されている複合語では、一般的に（語基と接頭辞の）二箇所に分かれる強勢母音が保たれる。複合語のなかには、構成要素である接頭辞が常に無強勢として実現されるものもあれば、接頭辞が磨耗されるものもあり、その結果（複合語自体が）強勢をひとつしか持たない語も存在する。』¹⁴

上記の説明における「（前略）複合語のなかには、構成要素である接頭辞が常に無強勢として実現されるものもあれば、接頭辞が磨耗されるものもあり、（後略）」では、前半部分で「弱勢接頭辞」を、後半部分で「強勢接頭辞」を指していると思われる。この接頭辞内にある弱勢音節に位置する母音が、弱化を起こすのか否かは接続される語基によってさまざまで一定していないことから、接頭辞により強勢、弱勢と明確に分けることが困難である。たとえば、接頭辞 pre- が付加されている *preromà* [pre.ru.'ma]「古代ローマ以前の」、*precontracte* [pre.kun.'trak.ta]「予備契約」の2語は pre- の中の /e/ が弱化しない

14 ()内は筆者が追記した。

代表例で、*prejudici* [prə.ju.'ði.si]「偏見」、*premeditar* [prə.mə.ði.'ta]「の計画を練る」の2語は *pre-* の中の /e/ が [ə] へと弱化される代表例である (IEC, 2016)¹⁵。

上記では、接頭辞が用いられているものの、構成要素となる語基によって接頭辞内の弱勢音節における母音弱化が遂行されるかどうか異なる例を確認した。加えて、同語彙においても母音弱化の発生有無のバリエーションが存在し、実現も変種の数だけ異なる。*preromànic* という語をとりあげれば、カタルーニャ語の綴り字 <e> に対応する可能な発音から [prə.ru.'ma.nik], [pre.ru.'ma.nik], [prɛ.ru.'ma.nik] の3パターンが考えられ、なかでも注目されるのは接頭辞 *pre-* の発音パターンが [prə~pre~prɛ] とあげられる点である。母音弱化現象の有無に加えて、閉母音 [e] と開母音 [ɛ] のバリエーションも観察されている (Bonet et al., 1998)。

2.5 先行研究の解釈から定義の再検討

以上、DIEC 2 (2021)、Carrera Sabaté et al. (2014)、GEIEC (2022)、Harris (2005) で記述されている母音弱化現象に関する解釈について、各先行研究の定義づけにおける着眼点とそれに付随する問題点、先行研究の当該現象の捉え方について相互に類似している点について指摘してきた。母音弱化現象を通言語的に定義するために主眼が置かれている点を下記にまとめる。

(7) 母音弱化現象の定義づけのための要素

- a. 調音的特徴と韻律的特徴、形態的特徴に関する言及：
Carrera Sabaté et al. (2014), Harris (2005)
- b. 強勢位置と弱勢位置での音韻的弁別性の消失：
Carrera Sabaté et al. (2014), DIEC2 (2021), Harris (2005)
- c. 母音音価の変化：Carrera Sabaté et al. (2014), GEIEC (2022)

15 “La distinció, amb tot, no sempre és nítida i hi ha casos de vacil·lació en el manteniment del timbre de la vocal en la mesura que el mot prefixat deixa de ser percebut com a tal (§ 3.3.1.2a): en el prefix *pre-*, per exemple, es tendeix a mantenir la vocal sense reduir en mots com *precontracte* o *preromà* i se sol reduir en mots com *prejudici* o *premeditar*.”

『しかしながら、接頭辞の区別は明白ではなく、接頭辞付加された語がそのまま知覚されない程度に関して、母音の音価が維持されるかに揺れがみられる (§ 3.3.1.2a も参照)：たとえば、接頭辞 *pre-* を付加させた場合、*precontracte* や *preromà* においては、母音 *e* は弱化することなくその音価が保たれる傾向がある。一方で *prejudici* や *premeditar* のような語では母音弱化することが多い。』

d. 無強勢音節または接辞に発生 : Harris (2005)

共通して散見される母音弱化の特徴を列举すると、おおむね a. 調音的特徴と韻律的特徴、形態的特徴に関する言及、b. 強勢位置と弱勢位置での音韻的弁別性の消失、c. 母音音価の変化、d. 無強勢音節または接辞に発生の 4 点に収束している。これらの先行研究の内容を引用しながら、言語の垣根を越えて観測される母音弱化現象の音環境、条件、特徴に言及した定義の再構築を試みる。

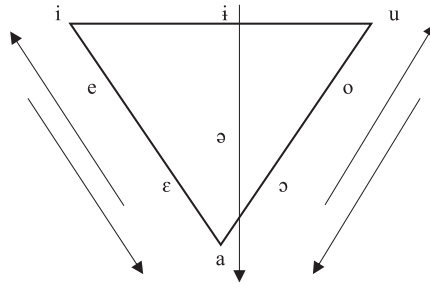
(8) 母音弱化現象の再定義

強勢位置において保たれていた母音の音韻的弁別性が弱勢位置で中和され、別の母音に置換されることにより音韻的対立が喪失するプロセス。語の弱勢音節や接辞が弱化対象であり、当該音節は韻律的および形態的に弱い。

上記の定義は筆者が、2.1 DIEC 2 (2021)、2.2 Carrera Sabaté et al. (2014)、2.3 GEIEC (2022)、2.4 Harris (2005) でそれぞれ述べられている母音弱化現象の特性を一文に統合させたものである。一見すると、個別言語に頼ることなく当該音韻現象の様相をみせる言語に共通して適用可能な釈義を呈していると考えられるが、考慮すべき問題点が存在する。それは、音韻的弁別性が中和されたのちの収斂先の母音音価を詳細に認定できていないことである。これまで引用してきた先行研究および定義では、さまざまな言語に通底しているとされる母音変化または変化先の母音音価の具体的な記述がなかったため、「別の母音に置換される」と記載せざるをえなかった。ゆえに、世界の多くの言語で観察される音韻的なプロセスとして母音弱化現象を再定義するために、弱化を経て実現されることとなる母音に共通する特徴ないしは変化のプロセス自体にみられる共通項を探す必要がある。そこで、Harris (2005) では 2.4 で示した母音弱化現象の特徴を述べているだけでなく、母音の収斂方向についてつぎのように議論されている。母音弱化の方向性は主に 2 種類みられることを容認し、遠心方向の母音弱化 (*reducció vocàlica centrífuga*: 以下 CF と略記) および求心方向の母音弱化 (*reducció vocàlica centripeta*: 以下 CP と略記) に二

分している。CF とは、母音三角形上に母音弱化現象の弱化方向を描写した際に、三角形の各頂点に位置している母音 *i*, *u*, *a*¹⁶ へと導かれるものが該当する。また、カタルーニャ語西部方言に観察されるような $\epsilon > e$ および $\text{ɔ} > o$ も収斂の方向に関して同様の分類に含まれるといえるだろう。なお、Harris (2005) が議論の中核としている「要素理論 (Element Theory)」では、中舌母音の開口度によって複数の母音をもつ言語で起こりうる母音弱化をとりあつかっておらず、十分に補完することができないため、上記の弱化については言及されていない。

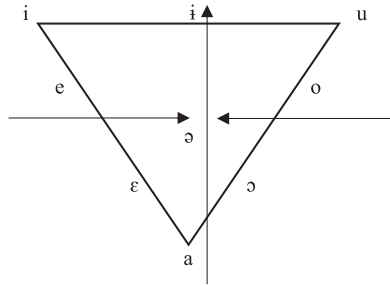
(9) 母音三角形上に図示された CF の方向性



一方、CP は求心方向の母音弱化であるため、(10) で描写しているように母音三角形上の中心に位置するものの各頂点にあてはまらない母音、すなわち *i*, *ə* に弱化するものが含まれる。「求心」、「遠心」という呼称がついており、これらの2種類のタイプは正反対の体系であるため、母音三角形上に描かれるやじるしの方向性も CF をあらわしている (9) とは逆である。したがって、CP では母音三角形の外側に匹敵する母音 *i*, *e*, *ɛ*, *a*, *ɔ*, *o*, *u* が、下部の頂点 *a* を除く中心部に位置する母音 *i*, *ə* に弱化する。Carrera-Sabaté et al. (2014) で母音弱化の特性として示唆されていた文言「音声的に、その母音は音質の観点から中舌母音に、(後略)」という部分は、この CP の原理から導入されていると考えられる。

16 Harris (2005) では、corner vowels という用語を用いている。

(10) 母音三角形上に図示された CP の方向性



筆者が先行研究から (8) で提案した母音弱化現象の定義において、個別言語においてアドホックな解釈しかできなかった部分「別の母音に置換されること」に関して、上記で述べた 2 種類の母音弱化現象の種類に鑑み、再度当該現象を定義しなおすと下記のようにあらわされる。

(11) 先行研究の解釈と弱化の種類を含めた母音弱化現象の定義

強勢位置において保たれていた母音の音韻的弁別性が
弱勢位置で中和され、音韻的対立が喪失するプロセス。
本来、強勢位置に存在していた母音は母音三角形上で
遠心方向あるいは求心方向へと弱化する傾向がある。
語の弱勢音節や接辞が弱化対象であり、当該音節は韻
律的および形態的に弱い。

3. カタルーニャ語における母音弱化現象

2. では通時的な観点をとりいれた母音弱化現象の一元的な記述をめざし、先行研究の指摘から特徴および問題点を列記し、定義をまとめた。3. では筆者による解釈にももりこまれているが、Harris (2005) で分析された 2 種類の弱化性質を実際にカタルーニャ語にあてはめ、どのような特性を備えているのかを観察する。Harris (2005) では、通言語的にみられる母音弱化現象の例および要素理論の妥当性の証明として、ルイセーニョ語、ベラルーシ語、ブルガリア語をあげている。カタルーニャ語も含まれているが、本稿では 3.1. で詳述するため以下の羅列には記載していない。

(12) 諸言語における弱勢音節内での母音弱化¹⁷

- a. ルイセーニョ語¹⁸ : /i, e/ > [i], /a/ > [a], /o, u/ > [u]
- b. ベラルーシ語¹⁹ : /i/ > [i], /e, a, o/ > [a], /u/ > [u]
- c. ブルガリア語²⁰ : /i, e/ > [i], /a/ > [ə], /o, u/ > [u]

2.5 で引用した Harris (2005) の CF, CP 案を基盤に各言語の母音弱化の体系を記述すると、ルイセーニョ語の弱化現象は /e/ > [i], /o/ > [u] になる変化の 2 種、すなわち CF のみで構成されている。同語派を形成するベラルーシ語も同様に /e, o/ > [a] の母音弱化しか観察されないため CF 言語といえることができる。一方、ブルガリア語は前舌母音 /e/ > [i] および後舌母音 /o/ > [u] の CF と中舌母音 /a/ > [ə] における CP のふたつの系統がみられ、ひとつの言語内において CF と CP で 2 : 1 の関係性が成り立つ。上記に示した 3 言語のように弱勢音節または形態的に弱い要素において母音弱化が体系的に起こりうるロマンス諸語は、カタルーニャ語およびポルトガル語である。本稿では、カタルーニャ語の母音弱化現象のみに焦点をあて、Harris (2005) が参照した 3 言語にはみられない複雑性をまとめる。

3.1 CF, CP 案による弱化体系の記述

ここではカタルーニャ語の母音弱化現象について Harris (2005) の CF, CP 案をもとに分析する。まず、強勢音節と弱勢音節に実現されうる母音について整理する。東西方言に共通して強勢位置でたつことが可能な母音は [i, e, ε, a, ɔ, o, u] の 7 母音²¹である一方、母音弱化により弱勢音節で存在しうる母音に関しては東西方言で様相を異にする。表 4 および表 5 は、それぞれ東部方言と西部方言における強勢母音とそれぞれの弱化後の母音音価について具体例とともにまとめたものである。

17 原文ママ。音価が変わっていないものに関しては母音弱化の一部として記載する必要はないだろう。

18 アメリカ合衆国カリフォルニア州南部で話されているユト・アステカ語族に属する先住民言語。

19 スラヴ語派、東スラヴ語群に属する言語である。

20 スラヴ語派、南スラヴ語群に属する。古代教会スラヴ語が現在のブルガリア周辺で誕生したことからスラヴ語のなかでも古い形態を多く残していると言われている。

21 バレアレス・メノルカ方言およびイビサ方言は、強勢位置にəが置かれることがあり、8 母音で体系を構成する。

表 4 : Reducció vocàlica dels parlars orientals (GEIEC, 2022)

Posició tònica	Posició àtona	Exemples	Tipus de reducció vocàlica
[i]	[i]	<i>família - familiar</i>	
[e]	[ə]	<i>carrer - carretó</i>	CP
[ɛ]		<i>mel - melós</i>	CP
[a]		<i>canta - cantar</i>	CP
[ɔ]	[u]	<i>fosc - foscó</i>	CF
[o]		<i>poc - poquet</i>	CF
[u]		<i>pluja - plujós</i>	

GEIEC (2022) を参考に一部改変

表 5 : Reducció vocàlica dels parlars occidentals (GEIEC, 2022)

Posició tònica	Posició àtona	Exemples	Tipus de reducció vocàlica
[i]	[i]	<i>família - familiar</i>	
[e]	[e]	<i>carrer - carretó</i>	
[ɛ]		<i>mel - melós</i>	CF
[a]	[a]	<i>canta - cantar</i>	
[ɔ]	[o]	<i>fosc - foscó</i>	CF
[o]		<i>poc - poquet</i>	
[u]	[u]	<i>pluja - plujós</i>	

GEIEC (2022) を参考に一部改変

表 4 に記載されているカタルーニャ語東部方言は CP3 : CF1 の割合で母音弱化の体系をなしている一方で、表 5 でまとめられているカタルーニャ語西部方言は CF の母音弱化しか存在しない。ゆえに、表 4 にまとめられているように、カタルーニャ語東部方言²²は強勢音節で [i, e, ɛ, a, ɔ, o, u] の 7 母音から弱勢音節で [i, ə, u] の 3 母音に収斂していることがわかる。一方で、表 5 に記載されているカタルーニャ語西部方言の母音体系に関しては、強勢音節で実現されうる母音 [i, e, ɛ, a, ɔ, o, u] の 7 母音と弱勢音節にたつことができる母音 [i, e, a, o, u] の 5 母音からわかるように、母音インベントリーの変化の様相が東部方言とは異なる。つまり、東部方言のほうが、収斂度合いが西部方言よりも高いといえることができる。また、両方言とも弱化の前後で音価に変化が生じていない箇所がみられるが、アクセントが置かれていない位置で実際に強

22 東部方言のなかでも、バレアレス諸島方言を構成するメノルカ方言およびイビサ方言では強勢音節内で中舌母音シュワ [ə] がたつことができるが、本文の記述では上記 2 つの方言を含めていない。

勢位置の音が完全に保たれているか否かはフォルマントを測定し強勢位置と弱勢位置で比較しながら、具体的に記述していく必要があるだろう。

3.2 母音弱化現象の対称性

つぎに、カタルーニャ語の母音弱化現象の複雑性を記述するために、再度 Harris (2005) で導入されていた母音弱化現象を体系的にもつ言語の例をとりあげる。

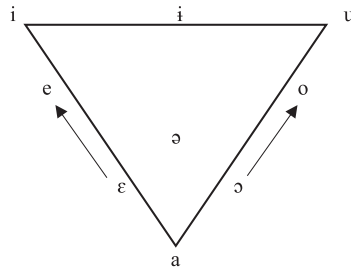
(13) [(12) 再掲] 諸言語における弱勢音節内での母音弱化

- a. ルイセーニョ語 : /i, e/ > [i], /a/ > [a], /o, u/ > [u]
- b. ベラルーシ語 : /i/ > [i], /e, a, o/ > [a], /u/ > [u]
- c. ブルガリア語 : /i, e/ > [i], /a/ > [ə], /o, u/ > [u]

ルイセーニョ語およびブルガリア語に共通して観察される特徴は、前舌母音かつ後舌母音で半狭母音 /e, o/ がそれぞれ [i, u] と高舌化していることである。ルイセーニョ語は前舌と後舌で1通りずつの変化しか存在しない一方で、ブルガリア語は上記の弱化に加えて中舌母音 /a/ において中和が発生する。このような違いは生じているものの、両言語とも口腔内の前後位置の観点から対称的な母音弱化現象を呈しているといえることができる。ルイセーニョ語とブルガリア語とは異なり、ベラルーシ語は前舌母音および後舌母音での母音弱化はみられず、半狭母音 /e, o/ から中舌母音 [a] の収斂が確認される。同様に、前舌母音と後舌母音がひとつずつ母音弱化の影響を受けているため、対称的な母音弱化体系のひとつであろう。

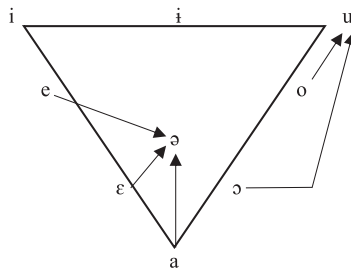
先述のカタルーニャ語の母音弱化現象に関する複雑さとは、上記で議論してきている「対称性」の有無である。はじめに対称性が担保されている弱化体系については、前述のように、カタルーニャ語西部方言の弱化体系があげられ、東部方言よりも幾分簡略化されており、開口度を基準とし、中舌母音のなかで完結する。したがって、半狭母音 /e, o/ から半広母音 [e, o] への変化は、ルイセーニョ語やブルガリア語のように前舌位置と後舌位置において1:1で対称的に弱化しているといえる。下記の (14) はその対称性を母音三角形に図示したものである。

(14) カタルーニャ語西部方言の CP の方向性



Harris (2005) が引用した 3 言語かつカタルーニャ語西部方言で確認された母音弱化現象の対称性がみられないのは、カタルーニャ語東部方言である。CP の場合、/e, ε, a/ が弱化対象である 3 母音であるのに対して、CF は /o, ɔ/ の 2 つのみである。また、弱化後の母音の調音位置も同一ではなく、CP の弱化後に現れる [ə] は理論的には半狭母音および半広母音の中間の位置に存在し、CF の弱化後に実現される [u] は強勢母音体系にもあるように後舌母音である。つまり、東部方言は CP, CF 案を用いることで、母音弱化の影響を受ける母音の総数および収斂先の口腔内の調音位置において非対称性を呈していることが明らかとなった。カタルーニャ語西部方言と同様、つぎのように東部方言の母音弱化現象における体系の非対称性を母音三角形にやじるしを用いて簡潔に表すことができる。

(15) カタルーニャ語東部方言における CF, CP の方向性



4. 考察と今後の課題

本稿では、最初に DIEC 2 (2021)、Carrera Sabaté et al. (2014)、GEIEC (2022)、Harris (2005) を先行研究として母音弱化現象の定義を確認したうえで各研究者

の立場を明らかにし、現象を定義するために共通してあげられている点を整理した。通言語的な視点を念頭に上記の先行研究でとりあげられていた着眼点を統一したのち、定義を新たに提案したが、その際に問題となっていた母音弱化後の母音の特徴および弱化の方向性に関する規則性は Harris (2005) の分析手法により認定可能であることがわかった。Harris (2005) の分析で中核であった CF, CP 案は通言語的に母音弱化の種類を記述するうえで大変重要な分類であり、本稿では、ルイセーニョ語、ベラルーシ語、ブルガリア語、カタルーニャ語を分析対象の言語として設定し、各言語の特徴を比較することにより、弱化の方向性に関してカタルーニャ語東部方言の非対称性が浮き彫りとなった。上記の言語のように母音弱化体系が観察されるロマンス諸語は、カタルーニャ語のほかにポルトガル語があげられる。CF, CP 案の観点から、カタルーニャ語のように対称性かつ非対称性のふたつが混在している言語であり、同じくラテン語を祖先とする言語としてカタルーニャ語との類似点、相違点の記述を欠くことはできない。

さらに、本稿で提案した定義では、母音弱化現象が強勢音節に存在している母音が弱勢位置において「音価が置換されること」のみに限定されている。冒頭で先行研究ごとにまとめたように、母音弱化現象が強勢が置かれていない音節に存在する母音が別の音価に置き換わり実現される現象であるとする前提のもとで議論を進めた。また、日本語、韓国語、オーストロネシア諸語、スペイン語などで特徴的な音声現象としてとりあげられる狭母音の脱落あるいは母音の無声化を母音弱化として許容している研究や分析も存在する。

(16) 日本語の母音脱落の例^{23,24}

- a. ありがとうございます /a.ri.ga.to.u.go.za.i.ma.su/ >
[a.ri.ga.to.u.go.za.i.ma.sØ]
- b. 洗濯機 /se.n.ta.ku.ki/ > /se.n.ta.kØ.ki/ > [se.n.ta.k(Q).ki]

23 日本語のモーラ構造にしたがって、モーラまたは拍 (mora) を単位として分節している。単母音 V あるいは子音と母音をひとつの組み合わせとした CV を自立拍または自立モーラ (mora independent) として換算し、撥音「ん」、促音「っ」、長音「ー」および二重母音の後部要素を特殊拍または特殊モーラ (mora especial) として考慮する。

24 本稿では、本来母音が実現されるべきところで脱落または無声化している箇所を Ø を用いて表している。

上記の (16a) と (16b) のように、狭母音が語末に存在する場合と無声阻害音に挟まれている環境において母音弱化の最終形態である母音脱落が発生する。(16a) では語末に存在していた狭母音 /u/ が消失するのみである一方、(16b) では該当の母音が消失することにより /ku/ という CV の構造で成り立っていた自立拍構造が崩れ、特殊拍 [Q] へと変容した²⁵。自立拍から特殊拍への移行は母音の周辺が同一の子音であったことが原因であり、異なる子音を周辺にもつ場合と語頭において同一の子音に挟まれている場合は脱落のみにとどまる²⁶。以上のように母音弱化は別の母音に変わるだけでなく、弱勢音節に位置している弱化対象の母音が最終的には脱落することも考慮しなければならないだろう。

5. 参考文献

- Bonet, Eulàlia et al. (1998). *Fonologia catalana*. Barcelona: Editorial Ariel, S.A.
- Carrera-Sabaté, Josefa et al. (2014). *Els sons del català*. Disponible a: <<http://www.ub.edu/sonscatala/ca/>> [Consulta: 18 de juliol de 2022].
- ésAdir El portal lingüístic de 3Cat (ésAdir). (2025). *Accentuació dels compostos i prefixos*. Disponible a: <<https://esadir.cat/gramatica/criteris/prefixtonaton>> [Consulta: 6 de gener de 2025].
- Harris, John. (2005). Vowel reduction as information loss. In Philip Carr et al. (eds.), *Headhood, elements, specification and contrastivity*. pp. 119-132. Amsterdam: Benjamins.
- Institut d'Estudis Catalans (IEC). (2016). *Gramàtica de la llengua catalana de l'Institut d'Estudis Catalans (GIEC)*. Barcelona: Institut d'Estudis Catalans.
- Institut d'Estudis Catalans (IEC). (2021). *Diccionari de la llengua catalana de l'Institut d'Estudis Catalans 2 (DIEC2)*. Disponible a: <<https://dlc.iec.cat/>> [Consulta: 15 de maig de 2024].
- Institut d'Estudis Catalans (IEC). (2022). *Gramàtica essencial de la llengua catalana de l'Institut d'Estudis Catalans (GEIEC)*. Institut d'Estudis Catalans.

25 母音が有していた有声性が失われることから無声化の現象としてあげられることもある。

26 たとえば、日本語の固有名詞である「久木田さん」の場合、/ku.ki.ta.sa.n/ > /kØ.kØ.ta.sa.n/ > [kØ.kØ.ta.sa.n]、普通名詞「拡大」においては、/ka.ku.da.i/ > /kØ.kØ.da.i/ [kØ.kØ.da.i] のように脱落するケースは共通語では頻繁である。しかしながら、日本語各方言の特徴やアクセント移動により、脱落が起きないケースも少なくない。

Pöchtrager, Markus. (2018). Sawing off the branch you are sitting on.

Acta Linguistica Academica: 65, pp. 47-68.

Pöchtrager, Markus. (2024). Vowel reduction in European Portuguese

and the removal of structure. In Gavarró, Anna et al. (eds.),

Isogloss. Open Journal of Romance Linguistics. 1-22. Bellaterra:

Universitat Autònoma de Barcelona.

東一夫他 (2019) 『標準ロシア語入門』 白水社 .

田澤耕 (2013) 『カタルーニャを知る事典』 平凡社 .

田澤耕 (2021) 『詳しく学ぶカタルーニャ語文法』 白水社 .

立石他 (2022) 『カタルーニャを知るための 50 章』 明石書店 .

